

# 共生

～やまぐち自然派宣言～



❖ 共生の思想を深める⑧

庫本 正

❖ 会長就任の御挨拶

久保田 啓子

❖ 令和2年度表彰受賞者

祝 環境保全活動功労者等知事表彰

杉山 滋

早川 善章

吉川 洋

古市節分草保存会

祝 山口きらめき財団理事長表彰

宇部自然保護協会



❖ お知らせ

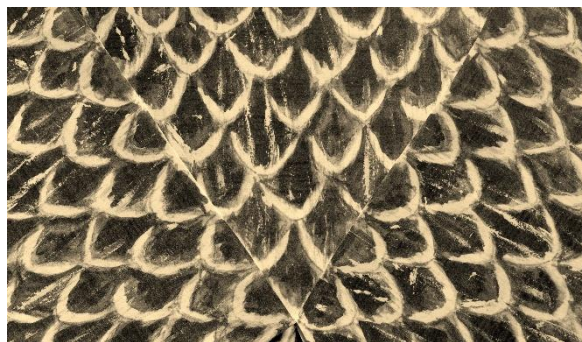
## キジの卵保護に関する興味ある行動

庫本 正

日常生活の中でも、ビックリするような出来事に遭遇することがある。この話はキジが自分の子孫を残すために維持してきた奇妙な反射行動である。

昨年の四月二十三日の朝のできごとだ。私はいつものように自宅前の麦畑の畦草を刈っていた。前日に刈るべき畦を下見して、多少よく伸びた所もあることを確認していた。草刈りを始めたが、半分ぐらい刈った所で草の伸びた所に来た。草刈り機の歯を麦畑の面から畦の斜面に掛けてゆっくりと動かした。ところが私の手にはプラスチックの板をなでるような感触が伝わってきた。あれ、変だぞ…と思った瞬間、草は一瞬にして模様（図1）の彫刻作品に変わった。まるで凄腕の手品師が得意の技を仕掛けたように思えた。その彫刻をじっと見つめているうちに、雌キジの背中や翼を被っている羽と分かった。我に返って、その翼を掴み、引つ張ろうとした。その瞬間に雌キジは私を振り切って、脱兎のごとく麦畑の奥へ突進した。跡には巢と九個の卵が残されていた。（図2）

よく考えてみると、キジは畑の床面と一段高い



（図1）筆者が見たキジが卵を被った翼のイメージ図

畦面との間に巢をかけ、卵を産み、抱卵中だったのだ。それとは知らず、私は草刈り機を入れたので、キジは巢や卵を守るために、体と両翼を広げる反射行動を起こしたのだろう。それにしても、その体・両翼を被う羽の模様（図1）は絶品だった。

\*

キジは日本の国鳥で、里地にも多く棲み、日常的に人と深い関係が生まれている。だから「キジの草隠れ」とか「足下から立つキジ」という諺がある。キジは特別に危険が我が身に降りかからなければ、逃避行動を起こさないのだろう。



（図2）キジの巣と卵

最後の手段として、模様（図1）のある体全身で相手を威嚇したにちがいない。キジの母性愛の強さは、「焼け野の雉子」の諺を残している。ヒナを育てる母親は野火で焼死しても体の下にヒナをかくまって守りきるといふ。

日本では、キジはめでたい動物だ。奈良時代のこと、山口県で白いキジが捕獲され、孝徳帝に寄進されたこともあった。あまりにめでたいので、年号が「白雉」に変わった（日本書紀大化六年正月の条）。人はキジを熟知しながら畏敬し、親近感を持ちながら共生してきたように思う。



## ◆会長就任の御挨拶

### 久保田 啓子

#### (あなたとNAGATOを結び隊)

令和二年度より、中村裕三前会長のあとを受けまして、会長を務めさせていただいております久保田啓子と申します。歴代の会長さんは頼りがいのある方ばかりでしたので、未だに力不足の私で良いのかと思っております。でも引き受けたからには、皆様に鍛えていただくつもりで頑張りますので、ご支援の程よろしくお願いいたします。

さて、昨年の二月末より新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、学校の休校、施設の閉鎖、活動の自粛等で、今年度になっても予定していた活動がことごとく出来ない状態でした。

本会も、総会は書面にて開催、リレーミーティングも、中村顧問が開催地としてご準備くださっていましたが延期とさせていただきました。皆様におかれましても、それぞれの活動がかなり難しかったのではなかったでしょうか。改めて感染症の怖さを感じるとともに、何もせずじっとしているだけでなく、いかに出来ることを見つけていくかそしてどうやって実施するかということの大変さを実感した一年だったと思います。私自身の仕事においても苦労しました。でも、その時にこの

「やまぐち自然共生ネットワーク」での経験に助けられました

私は現在、長門市教育委員会では社会教育指導員として、家庭教育や子育て支援、子ども会など、保護者や子供たちと関わる仕事をしています。今年度は、コロナ禍の中での活動をどう行うかが大きな課題で、相談を受け一緒に考え出来ることを行ってきました。中でも一番希望が多かったのは、自然とのふれあい体験でした。三密を避けるという観点から、外での活動と考えるのは自然かなと思います。ですが、それをどうやればいいかがわからないと言われ、必要なのはこの部分の支援でした。そこで役に立ったのが、毎年のリレーミーティングや皆さんの活動紹介で教えていただいた発見・感動・楽しさを感じてもらうことでした。

自分たちの住む地域を歩きながら、普段は見過ごしている自然や歴史について、足を止め説明を聞いて感じてもらうことを目的に行い、「えー、そうなんや」「近くにこんな歴史があること知らなかった」「あそこに蛇がおる」「こっちにカエルがおるよ」



「これって鹿の糞？」と、子供たちのキラキラした顔、そして子供の頃に帰ったようなお父さんお母さんの笑顔もあり、親子のふれあいもしっかり出来ていました。この経験を通して、自然を守ることの大切さを学んではしいと思いました。

本会の会長を受け、充て職が多いのにびっくり！ですが、その中に環境学習や環境推進などに関するものもあり、ネットワークの皆さんの活動そのものだなと思っています。令和三年度は、今年度実施が出来なかった山口県ひとづくり財団環境学習推進センター主催の「子ども環境学習講座・夏休みエコ合宿」内で、プログラムの一つである子ども樹木博士を八月に開催予定です。また、新規事業として、「サクラ部会」の設置について準備を進めております。

コロナ禍の今、オンラインでの集まらない会議や活動が広がってきています。その反面で実際に顔を合わせるこの大切さも感じています。今後は、無理のないように出来ることを出来る形で進めていきたいと思っておりますので、皆様ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりますが、昨年三月にこの会の会長としてもご尽力いただきました開村顧問が永眠されましたことをご報告いたします。感謝の思いを込めて心よりご冥福をお祈りいたします。

**祝 環境保全功活動  
功労者知事表彰**

〔受賞者〕 杉山 滋

〔功 績〕

河川関係の環境保全団体を対象とした交流会等を企画・運営し、団体間の連携を促進、環境保全に関する普及啓発に尽力。ボーイスカウト等の活動を通し、子どもを対象とした自然体験学習の指導にも取り組む。

**祝 環境保全功労者等  
環境大臣表彰**

〔受賞者〕

出会いの森ファンクラブ

〔功 績〕

放棄されていた雑木林を、憩いの場として魅力ある森となるよう管理するとともに、自然体験の機会を提供しており、その功績は顕著である。

**祝 環境保全功活動  
功労者知事表彰**

〔受賞者〕 吉川 洋

〔功 績〕

竹害（放任竹林）によって荒廃した里山の再生活動に取り組み、里山景観や野生生物の生育環境の保全活動に尽力。

**祝 環境保全功活動  
功労者知事表彰**

〔受賞者〕 早川 善章

〔功 績〕

自然再生士等の知識と経験を活かし、国指定天然記念物エヒメアヤメや、ソメイヨシノの生育環境保全活動に取り組むとともに、児童・生徒に対する自然に親しむ活動に尽力。

**祝 山口きらめき財団  
理事長表彰**

〔受賞者〕

宇部自然保護協会

〔功 績〕

快適な生活環境を維持するため、自然に親しみ、調査研究と環境保全に取り組むとともに、実践的な活動を通じて郷土の発展に寄与。

**祝 環境保全功活動  
団体知事表彰**

〔受賞者〕 古市節分草保存会

〔功 績〕

環境省レッドデータブック準絶滅危惧種に指定のセツブンソウの自生地保全活動をはじめ、自生地公開活動を通じた錦川清流線の利用促進に取り組むなど、環境保全や地域貢献に貢献。



## 山口県環境保全活動功労者

杉山 滋

(やまぐち水辺交流会、ボーイスカウト山口第3団)

このたびは、山口県環境保全活動功労者として、県知事賞をいただき、身に余る光栄と感謝の気持ちで一杯です。

私は、山口県の土木の技術屋として、県内のインフラ整備に勤しんで、四年前に退職しました。「環境保全」について、強く意識し始めたのは、河川課に勤務していた時です。当時（平成九年）河川法が抜本的に改正され、これまでの「治水」、「利水」に加え、「河川環境の整備と保全」が河川管理の目的に加えられました。このため、河川計画を立案するにあたっては、「河川環境」（水質、景観、生態系等）への配慮と同時に、地域住民の方々の意見を反映することも求められるようになりました。その時、計画立案の最前線にいた私は、自然の多様性と流域の文化等を学びながら、様々な河川愛護団体の方々と交流することができました。特に、錦川流域ネット交流会の代表世話人の白井啓二さんとの出会いは、衝撃的でした。錦川の自然を愛し、日常的に、流域の保全活動をしている姿を目の当たりにし、自分自身も何か貢献できないかと思ひ立ち、結成したのが「やま

ぐち水辺交流会」です。

「やまぐち水辺交流会」は、県内の川や水辺に関心を持つ人々が集い交流する会で、河川愛護団体の方々や、河川行政に携わっていた仲間で、平成十三年に結成しました。

主な活動としては、「山口の川・元気ワークショップ」集まれ山口の川自慢」と、河川の流域を探访するイベント「榎野川に行こう！」等を開催しました。前者は、河川愛護団体が、互いの活動を発表し、励まし合いながら交流する場として、ワークショップ形式で実施しました。後者は、河川を上流・中流・下流域の三つに分けてマイクロバスで巡り、流域の歴史や、自然、食文化などに触れながら、

川そのものだけでなく、流域文化も体験してもらうイベントです。例えば、榎野川流域の一の坂川では、全国に先駆けた河川改修が行われました。当時（昭和四



▲第17回全国河川愛護団体交流会山口大会（岩国市で開催）

十八年頃）の護岸は、コンクリートの三面張りが主流でしたが、住民の意見を反映し、ホタルの生態系に配慮した護岸が誕生しました。その具体的な経緯を当時の関係者に、現地で伺うことができました。また、栗野川では、地域の方々の振舞いによりシロウオや青のりの食文化を体験することができました。このように、県内五つの河川流域で、たくさんの方々の支援のもと、実施することができました。さらに、県内だけでなく、三重、福島県等、全国の河川愛護団体との交流会にも参加し、川で繋がる友人が増えました。交流会は、毎年、全国各地で開催され、昨年、二十回目を新潟県で迎える予定でしたが、コロナ禍で中止になりました（過去、山口県での幹事開催は四回）。

これまで私は、川を通して、様々な活動をしてきましたが、今も環境保全の活動が継続できているのも、数えきれない素晴らしい人との出会いがあったからです。

これからも、大好きな川を舞台に、出会いを大切にしながら、県内の環境保全に貢献していきたいと願っています。また、私は、現在、ボーイスカウト活動の指導に携わっており、これまで、植樹や野鳥の保護等、環境保全の活動を行ってきました。今後も、子供たちと一緒に、自然の素晴らしさと大切さについて、共に学び、保全活動を継続していきたいと思っています。

## 山口県環境保全活動功労者

早川 善章

### 知事表彰を励みに

山口県環境保全活動功労者の推薦のお話しを頂き、軽く受諾、事の重大さに気付くこともなく。式当日、受付から授賞式までの間、待合室での受賞者の会話が少ない、聞こえない、と言うコロナ禍感染のこともあり、空気の重い緊張感でした。式終了後は地元新聞社の取材を受けました。数日後、先輩・知人より受賞の喜びをいただき、有り難さを再確認できました。

#### 一 天然記念物エヒメアヤメの保存活動

防府市西浦のエヒメアヤメの保存会とご縁が出来、二十五年前より、エヒメアヤメの生育環境の助言をしています。保存会の丸山会長と共に、環境作りをしています。その後より新しい種子株も増えて来ました。関係者も喜んでいきます。継続は力なり。

#### 二 サクラの生育改善

宇部市内の某桜公園のサクラ生育改善に樹木医として取り組んでいます。年間管理計画を立て

地道に作業しています。

サクラの株下は、土を七十センチメートル掘ると海砂が出て来ます。真砂土で宅地造成した、劣悪な土壌です。植栽地の土壌改良は予算的に無理なので、私の研究の場として、肥料施肥と剪定をする事としました。三年後より、花数も増えて来ました。

お花見時期は人出も多くあり、自治会の世話役もご満悦。今では花見の名所となりました。

私の自宅横に、自慢のソメイヨシノがあります。昨年、太枝一本切り取り、ひと芽からの花の出数を調べました。七つ、四つの花数を見る事が出来ました。ひと芽から七つ、六つと咲くことは稀であり、正直、驚きました。日常の管理が出来ていると、樹木も反応してくれます。

#### 三 子ども樹木博士

公益財団法人山口県ひとづくり財団 環境推進センター主催「こども環境学習講座・夏休みエコ合宿」のプログラムの一つとして開催された「子ども樹木博士」を担当させて頂き、子ども達に緑との関わりや、樹木の大切さ、役割を伝える切っ掛け作りが出来たと思います。後に続く、緑の後継者が育つ事を願っています。

令和三年八月二十九日に、子ども樹木博士を予定しています。コロナ禍が心配ですね。

誰でも一年、いちねん、年が増します。私の体力、気力も低下しています。後継者も考えなければと思うこの頃です。私のボランティア活動を受け入れて下さる関係者の皆様に感謝申し上げます。



▲子どもたちへ樹木の説明をする様子（令和元年度開催「子ども樹木博士」）



# 山口県環境保全活動功労者

吉川 洋

## 里山の再生と森のそうじ番

このたびは、山口県環境保全活動功労者として県知事賞をいただき、ありがとうございますました。

私の活動は、住宅地近隣にはびこる竹害を排除して、里山ふうの森づくりを行っているものです。対象となる場所は、下松市に所在する県立下松高等学校の背面にある小高い山にあります。小さな山ですが宅地に接近してきたモウソウチクを駆除することから始めました。

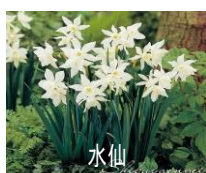
二十年前、この一帯は極度に荒廃していて、マツクイムシの被害を受けた枯れ松や一斉に枯死したハチクで占められ、山全体が蜘蛛の巣か灰をかぶったような山容を呈していました。そのうえ、一部にあったモウソウチクが爆発的に勢力を拡張、山を覆い始めようとしていました。

六十年ほど前の周南地方にある山や瀬戸内海に浮かんでいる島々には、黒松や赤松の大きな木がふつうに見られました。しかし、これがある時期を境にして、景色を激変させてしまうほどの松枯れ現象が起こったのです。

この松枯れと、モウソウチクの爆発的な繁茂に関係があるのかは知りませんが、極端な植生の遷移が短期間のうちに起りました。このような背景があつて、竹を切り始めることから現在に至っています。六十歳の還暦の年から数えて十八年が経ちました。

最初に伐ったのは五、六本のモウソウチクでした。さらに伐り進めると、周囲が明るくなり、想像もしなかった陰翳に富んだ山肌が現れてきました。このささやかな覚醒がきっかけとなって、がむしやらに竹を伐ってきたのです。

ここでの「里山の再生」とは、竹害に耐えて生き残った樹木と竹を伐った後に植栽した山野草で構成する「癒しの森」にすることでした。



作業を開始してから六年後には、「やま」の外景観と内景観はすっかり変わりました。森の内部には光が届き、風通しもよくなりました。

この頃より、山野草を植えることもできるようになりましたが、植栽については、成功率五十%くらいでしょうか。ユリの球根は植えた分のすべてをイノシシに掘られてしまい全滅となりましたが、フジバカマは順調に株を殖やして、アサギマダラ（蝶の一種）の訪れに一役買っています。今は、小動物も還って来つつあります。竹を伐るまでは、昼間でも光が届かず、人の立ち入りを拒んできた鬱蒼とした竹やぶが、花や鳥や蝶を目にするのできる空間に変わってきたのです。

この「やま」には等高線状の段丘が見られます。古の時代、ここには耕作地のようなものがあつたのかもしれませんが。起伏に富んだ地形が多くみられ、草刈りなどの清掃作業を行なう度に稜線が際立って、絵画の世界を呈します。

大ヤブであつたものが今の状態になつたのは、単なる成り行きであつたにしても、振り返ってみると、その過程は案外、楽しく、充実したものでした。私は「森のそうじ番」と自分のことを称しております。

日本の歴史区分のひとつになっている南北朝時代、地元、鷺頭の庄（現在の下松市切戸川流域一帯）に居館を構えていた北朝側の守護職・鷺頭長弘と南朝側の守護職・大内弘世が周防の覇権を争つて何度も戦い、最後の決着をつけたのが「白坂山」と呼ばれていたこの「やま」一帯でした。このような激戦地であつた過去の「記憶」を持つ土地での作業は特別な趣を与えてくれています。下松高等学校の横では狐塚古墳も発見されていますので、この「やま」には未発見の史跡が埋もれていても不思議ではありません。

このような歴史については、『下松市史通史編』や『下松市史異説』などに教えられました。この中に興味深い記述がありました。それは、この「やま」一帯が中世は「白禿山」とも呼ばれていて、まばらに生えた松林であつたとありました。昭和

十三年頃の写真もありますが、今のような植生とは似てもつかぬ山の姿です。竹や照葉樹らしきものは見えません。

自身の記憶では、六十年前の昭和三十六年頃は木版画の世界を見ているような印象でした。海浜近くでは松葉の絨毯を踏みしめた感触を今でも憶えています。現在、私の住む所から、松の木は全く目に入りません。視界に入るのは東西南北どちらを向いても、竹に覆われている山々です。風土工学という新しいジャンルの学問に「景觀十年、風景百年、風土千年」というフレーズがあるそうです。

景觀は現在の姿を現しているものであり、風景は過去と現在という時間軸を感じるもの、そして、風土は時間軸の中に歴史、文化がよみとれ、伝わってくるというものです。

人間は幼少時よりこれらを五感で感じ、自分の故郷として生涯、心に刻んでいます。それは、ふるさとの山を想う安心感や懐かしさ、しみじみとした喜びなどがそうです。わずか六十年前には、どこにでもそのような理想の風景があつたのですが・・・しかし、今はどう見てもそれが衰微・荒廃へと進んでいるようにしか見えません。私が気になるのは荒廃した状態の山を見ても何も感じない人が多くなっているのではないかということです。つまり、異常な現象と本来の自然の姿

との境界が分からなくなってきたしまった、というものです。

竹は日本文化に欠かせない生活の資材として幅広く利用されてきましたが、戦後の復興期と高度経済成長期を境にしてプラスチックに置き換えられ、需要が衰退してしまいました。

その結果、竹林は放置され、荒廃して今日の状態を招いたとされています。これを元の風景に戻すには、どう、頑張っても容易ではありません。しかし、私達は、かつての美しい景觀や風景を再生・育成するための方法をなんとしてでも導き出して、次世代に継承していく責任を負っているように思います。

地域の一員として、これからも里山の健全な再生と育成について考え、行動して参りたいと思っています。ありがとうございました。



▲山口県環境保全活動功労者の表彰式の様子  
(左) 筆者 (右) 村岡知事



# 山口県環境保全活動功労団体

## 古市節分草保存会

会長 林 節司

このたび、山口県環境保全活動功労団体として知事表彰をいただき、会員一同大変光栄に思っています。特に、今回の受賞の「主な功績」の中で、環境保全だけでなく地域振興に貢献という項目が入っており、我々の目指している地域振興がようやく認められたような気がします。

### 〈自生地公開と地域振興〉

さて、保全活動はともかく、自生地公開と地域振興について、今までの経緯と今後の展開について考えてみたいと思います。

当初、公開するか否かについて議論しました。結論から言えば、山口県で初めて見つかった希少なセツブンソウを、どんなものなのか見ていただく、と同時に保全活動を展開していくことにしました。

一般的には、マイカーを中心に広く呼びかける方法ですが、安易に公開したため、盗掘など自生地が荒廃したり、周辺住民からの苦情など、失敗に終わったところが、全国各地にみられます。私たちも二の舞を踏まず、慎重に協議しました。も

しマイカーを対象にした公開に踏み切れば、様々な問題点が考えられました。例えば、自生地周辺に駐車場がない、自生地のキャパの関係、ゴミ、トイレ、排気ガス対策、人手と経費、そして心無い人による盗掘問題など。クリアすべき問題点がたくさん出てきました。

そこで、当地域ならではの公開方法はないものか議論した結果、第三セクター錦川鉄道を利用しない手はないとの結論に至りました。幸い、二月の厳冬期は観光客もほとんどなく、経営の厳しい錦川清流線にとっては、渡りに船であったのではないかと思います。何といっても、公共交通機関を利用すれば全国から見学に来られるというメリット、人手や経費が掛からず、公共性、話題性もあり、行政やマスコミがしっかりサポート、見学ルート途中の

商店街とのコラボ、そして見学者のために開発したセツブンソウグッズ（一筆箋、タオル、饅頭、クッキーなど）の開発・販売など地域の活性化に少しでも



役立っていると思います。このような中で、地元小学生を中心に「キッズガイド」の養成など、地元密着型の地域振興が芽生えつつあります。

### 〈今後の展開〉

最後に、今後の展開ですが、錦川清流線利用者のみの特別公開は継続しながら、環境保全活動団体との交流、地域ぐるみの環境保全活動の実施、自生地の拡大などが挙げられます。特に、現在計画中ですが、地元小学校のふるさと教育の一環として、セツブンソウ七つの謎の解明を目的としたセツブンソウ生態観察クラブ（仮称）の創設です。



## 山口きらめき財団理事長表彰

### 宇部自然保護協会

事務局長 福場 達朗

## 新しい時代に向けて前進

当協会は今年、五十年の節目の年を迎えます。半世紀という歴史の中、霜降山横断道建設計画への反対や小野ゴルフ場建設計画阻止など郷土宇部市の多くの問題を考えてきました。また小野湖清掃作業は、昨年で四十六年目を迎える歴史ある活動となり、改めて継続することの難しさを感じています。この清掃作業には、述べ四千人余りの市民の皆さんが参加されておられます。八月の暑期中、汗をかきながら湖面に入り作業すること水の大切さ、そして飲料水原水の実態を肌で感じる重要な一日となってきました。この様な数々の活動を今まで行ってきた多くの先人の方々のご努力が芽生え、昨年十月、晴れて山口きらめき財団「きらめき賞」を頂くことが出来ました。会員一同感謝申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でほぼ全ての活動を中止しました。八月に開催しておりました小野湖清掃作業も中止する事となりましたが歴史ある活動であるためコロナ感染者が

少し落ち着いているとき、方法を変えて行うこととしました。そして十一月十五日、クリーンウォーキング in 小野湖(ゴミ拾い)を開催することとしました。当日快晴の清々しい朝、アクトビレツジおの・厚東川ダムの二箇所に集合しました。今回も専門学校や高校生の皆さんの参加が多く、世代を超えた参加者を見てとっても頼もしく感じられました。火ばさみとゴミ袋をもらい九時に感染症対策をして出発、道脇のゴミを拾いつつ歩く。下見では車窓からのためか全く見当たらなかった缶や瓶でしたが、いざ歩いてみると大変多く見受けられ、すぐに袋がいっぱいになりました。一時間歩いた所で終了、引き返しながらゴミ袋を回収、出発地点に戻る。そこで分別と計量を行いました。その結果、二つのコースで回収されたゴミは、合計で百二十六kg。皆さんの多くの汗と力で無事回収することが出来ました。集められた不燃物二十二袋・可燃物三十一袋・危険ごみ三袋は宇部市で処分。

参加された皆さんは、参加して良かったとそれぞれ言われておられました。小野湖は宇部市・山陽小野田市の飲料水原水であり、また産業の柱である工場用水にも使われています。周辺は自然豊かな樹林に包まれ貴重な動植物が生息している宇部市にとって重要な北部地域であります。この地域を宇部市では八年前より生物多様性保全地

域に指定しています。今回の方法を変えて行った小野湖清掃作業から地球環境を見直す第一歩な

って頂ければ幸いです。  
コロナ禍の現在、協会の運営もグラデーションな活動となっておりますが、今こそ設立当初提言した「小野湖の水質保全と霜降山環境保護」この二つの原点に戻り新たな一步を切り開き六十年、七十年と前進していきます。





◆令和2年度会長表彰について

祝 やまぐち自然共生  
ネットワーク会長表彰

〔受賞者〕 植田 高弘

〔功 績〕

下関市蓋井島に生育する  
県指定天然記念物ヒゼンマ  
ユミの保全活動等に尽力し、  
その功績は顕著である。

祝 やまぐち自然共生  
ネットワーク会長表彰

〔受賞者〕 梶崎 アツ子

〔功 績〕

豊富な経験と経験を活かして  
自然体験活動のサポートに  
取り組む等、幅広く活躍し、  
その功績は顕著である。

※令和2年度やまぐち自然共生ネットワーク会長表彰は上記2名の方が受賞されました。授賞式は、新型コロナウイルス感染症対策のため、令和3年度に延期されました。

◆サクラ部会の設置について

令和二年度通常総会（書面開催）にてお知らせしましたとおり、令和三年度、本ネットワーク内に「サクラ部会」を設置予定です。部会概要や入会方法等、詳しくは、令和三年度通常総会にてお知らせする予定です。

◆会報誌について

会員の皆様から、自然に関する記事を随時募集します！「自然」をテーマに、皆様の活動紹介や、日常で発見したささやかな出来事など、何でも構いません。ご協力いただける方は、広報担当（裏面の連絡先）までお知らせください。

◆ホームページについて

やまぐち自然共生ネットワークのホームページでは、本ネットワークの情報のほか、会員の皆様が個人又は団体で主催するイベント情報等を発信しています。ぜひご覧ください。各種情報をホームページ掲載希望の方は、広報担当（裏面の連絡先）までお知らせください。

◆新規会員募集について

令和三年三月一日現在の会員は、

＊団体会員 三十七団体

＊個人会員 九十四名

自然に興味がある方など、どなたでも大歓迎です。一緒にネットワークの輪を拡げましょう。

\*\*\*\*\*

このたび執筆いただきました皆様には心よりお礼申し上げます。ご意見・ご投稿を、お待ちしております。

広報担当 中村



阿弥陀寺（防府市）のアジサイ

次回のリレーミーティングは、防府市にて開催予定です！詳細が決まり次第、皆様へご案内します。お楽しみに♪

## 〈 表紙の写真説明 〉

### 1 イノシシ（イノシシ科）の親子

イノシシは春から秋にかけて出産します。9月下旬の母親のお乳を飲んでいるところ  
です。イノシシの母親は子の世話をよく行い子育て上手です。

### 2 タヌキ（イヌ科）の親子

タヌキは4月の下旬から5月に出産し子育てを行います。7月の下旬、母親が先頭に  
子供たちを連れて歩いています。この写真ではわかりませんが、最後に父親がいます。  
タヌキは父親も育児をします。

### 3 アナグマ（イタチ科）の親子

アナグマは3月に出産をします。8月下旬、母親とともに子供たちが歩いています。  
アナグマの母子は1年間一緒に生活をします。父親は交尾のみで、子育てはしません。

（写真提供及び解説：山口博物館 田中 浩 様）

## やまぐち自然共生ネットワーク

～次世代につなごう美しいやまぐちの自然～

〔総務・企画担当〕 岡村 安彦（事務局長）

〔広報・会計担当〕 中村 佐和子

広報関係 お問い合わせ先

〒753-8501

山口市滝町1番1号 山口県環境生活部自然保護課内  
やまぐち自然共生ネットワーク広報担当

(TEL) 083-933-3060 (FAX) 083-933-3069

ホームページ

<http://www.yama-kyou.net/>

E-mail アドレス

[info@yama-kyou.net](mailto:info@yama-kyou.net)